

油症患者における口腔乾燥症に関する研究

研究分担者 川崎 五郎 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 准教授

研究要旨 油症の歯科検診において口腔乾燥症を訴える患者はしばしば認められる。しかしながら、実際には口腔乾燥があまり認められないにもかかわらず、口腔乾燥感を訴える場合もみられる。そこで、今回、口腔乾燥状態を客観的に調べるため口腔水分計を用いて研究を行った。長崎県地区における油症の認定者と未認定者を対象に、歯科検診時に任意に選んだ患者について測定し検討を行った。今回の結果では、測定値は23.1から31.2とばらつきはみられたが、平均値に関しては地域間や認定者未認定者間に有意な差は認められなかった。

A．研究目的

油症患者における口腔領域の症状のうちのひとつとして口腔乾燥症があげられる。現在でも、検診時口腔乾燥を訴える患者は少なくないが、主観的な症状も含まれ、実際に口腔内の乾燥がおきているか否かは不明である。本研究では、口腔水分計を用いて口腔内を測定することにより、油症患者の口腔乾燥の程度を測定することを目的として研究を行った。

B．研究方法

平成26年度長崎地区における油症検診において、通常の歯科検診時、ランダムに選んだ患者のうち同意の得られた患者で測定を行った。測定は、口腔水分計ムーカスを用い、各人において3回測定を行い、その平均値をデータとして用いた。測定は、舌尖部から10mmの舌背部分で行った。

(倫理面への配慮)

本研究の解析結果においては、個人が特定できるようなデータは存在しない。

C．研究結果

対象者は、平成26年度長崎県油症検診で歯科検診を行った患者のうち、長崎地区31名、五島玉之浦地区39名、五島奈留地

区27名の計97名であった。対象者全員の値は23.1から31.2に分布しており、その平均値は28.2であった。地区別では、長崎地区28.3、玉之浦28.1、奈留28.5で地区別での有意差はみられなかった。また、性別では男性28.6女性27.9と男女間の差はみられなかった。油症の認定および未認定別では、認定者が65名で未認定者が32名であった。測定値は認定者28.1、未認定者28.3であった。口腔乾燥感を訴える患者は、認定者に多くみられる傾向があったが、実際の口腔内の湿潤度の計測では有意差はみられなかった。

D．考察

油症発症当時から、歯科口腔外科的主訴の一つとして口腔乾燥症があげられている。これまで我々は、マウスを用いた実験で、PCB投与したマウスにおいて特に耳下腺における形態変化および生化学的な変化を認めた。そしてこれらの結果から、油症患者の唾液腺でも何らかの形態的ならびに機能的変化がおり、それが口腔乾燥症の症状に影響を及ぼしている可能性があることを示唆した。一方、一般の歯科治療時において唾液の流出が十分であるにもかかわらず口腔乾燥感を訴える患者も

しばしばみられる。そこで、今回は、油症患者において実際に口腔乾燥がおきているのか否かを、口腔内の湿潤状態を測定することによって口腔乾燥症に関する客観的なデータをみる研究を行った。今回の結果からは、口腔乾燥に関し、地域的な差はみられず、また、油症患者においても認定および未認定の患者間に有意差は認められなかった。今回の結果からは、認定者と未認定者の間での比較であるため十分な検討はできていないものの、差がでなかった原因として、油症発生から時間がたっているため唾液腺の機能が回復していること、基礎的疾患との関係についての検討が不十分であったこと、測定した患者数が少なかった、などが考えられた。

今後は、油症地区での一般の患者での計測結果との比較検討、PCB 血中濃度との関係、油症患者における複数年度での計測、糖尿病などの全身疾患との関わりなどについても検討していく予定である。

E . 結論

油症患者における口腔乾燥症を客観的に評価するために口腔水分計ムーカスを用いて検討をおこなった。認定患者に口腔乾燥を訴える人は多い傾向にあったが、実際の測定結果では、認定者と未認定者間に口腔乾燥に関する有意な差はみられなかった。

F . 研究発表

学会発表

なし

G . 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

なし